

日ロ・オンライン会見 2024（9/18－20）抄録

－内政・社会－

A.KOLESNIKOV “ノーヴァヤガゼータ・モスクワ”編集委員
L. GUDKOV 独立系世論調査機関 “レヴァダセンター”前代表
T.STANOVAYA カーネギー・ベルリン客員アナリスト

－経済、石油/ガス産業－

A.PROKOPENKO カーネギー・ベルリン客員アナリスト
N.ZUBAREVICH 国立モスクワ大学地理学部教授
M.BELOVA 石油・ガス事業コンサルタント

－軍事－

N.A. 軍事ジャーナリスト
Y.FYODOROV 軍事ジャーナリスト

－中ロ関係・朝鮮半島・米ロ関係－

A.MASLOV アジア・アフリカ諸国大学学長
N.A. 朝鮮半島ウォッチャー
D.SIMES ソ連生まれ、米国籍を持つ米・ロ関係ロビイスト

なお、本インタビューは、日露学術報道専門家会議が主宰しておこなわれた。

（文責：西谷）

－軍事－

●9/18 N.A. (軍事ジャーナリスト、モスクワ在住)

Q：クルスク越境侵攻をどう見るか？

・2024 になって、ロシアはゆっくりだが、ドンバスでの進軍をつづけている。プーチンはウラジオストクの東方経済フォーラムで、ウクライナ軍を弱体化し、領土と兵力を奪うことが目的だと言っている。

・ウクライナ軍の方は、8 月までロシア軍に押されての防戦だった。そこで 9 月に、動員法改正（8 月までに 15 万人を計画）と欧米兵器の補充による軍備リザーブを使って、脆弱なロシア北西部の攻撃をおこなった。つまり、経験の浅い若い兵士だけの、一番弱いところを急襲した。

・ウクライナによる攻撃は不意だった。ただ、ウクライナ側もその意義がよくわかっていないのではないか。戦術的な成功を収めたが、戦略的には成功していない。

・クルスク攻撃からすでに 1 ヶ月以上。ロシア軍はウクライナ軍を撤退させることができていない。ウラジオストクの東方経済フォーラムで、プーチンはドンバスの部隊をクルスクへ移動させるつもりはないと明言。

Q：ドンバスの戦況は？

・ドンバスにおけるロシア軍の状況も、血にまみれた袋小路に陥っている。平原での進軍は、数 10 から数 100 のドローンと激しい砲火に身をさらすことになり、進軍は 1 日 100 メートルか 1 キロという単位で緩慢。しかし、確実に進軍している。

・10 月になると雨が降り始め、地面がぬかるんで、道路は泥の海になる。やがて凍り、雪がつもる。戦車や補給用のトラックは動きにくく、塹壕の中は凍結する。その冬が、もう間近に迫っている。したがって、11 月には夏の攻勢が終わる。

Q：兵器の保有状況は？

・ロシアは冷戦時代に製造した戦車を 10 万台保有。旧式を改良した車両と新型を装備。3000 両が破壊されたが、まだ十分に残っているだろう。

・戦車の後ろについて歩兵が進む第一次大戦に似た陸上戦。大砲の増産に必要な金属精密加工機械、砲身や戦車、ドローンの製造に必要な特殊鋼やボール・ベアリング、先端半導体の調達、確保などが課題となっ

ている。

・ウクライナは欧米による軍事支援（戦闘機、戦車、戦略ミサイル、砲弾など）の他、欧米部品を使って国内でドローンをつくっている。また、ソ連時代にミサイル製造センターだった歴史もあり、中距離戦略ミサイルをつくる能力がある。

Q：停戦、和平の見通しは？

・このままでは停戦交渉も、和平交渉も不可能。ただし、11月に何か起こるかもしれない。11月になれば、夏の攻勢は下火になる。それに、米国の大統領選挙の結果が状況を変えるかもしれない。

・お互いがこのまま血まみれの袋小路に入ったとき、戦争そのものを「朝鮮半島」のように凍結する動きへ向かうことも考えられる。他に、カシミール、キプロスの例もある。いま現在は、その可能性は見通せないが、11月になれば有り得る。ただし、平和条約交渉には進まない。

・総じて言えば、戦争が日常化、常態化するなかで、この2年半の死傷者数は両国で100万人にのぼる。ロシア軍の戦死者は15万－20万人（英BBCなどは、公開情報で氏名を確認しただけで7万人以上と報道）、負傷者は40万人、またウクライナ軍はそれぞれ8万人、20万人にのぼると言われる。

・ウクライナ軍は、ロシア軍が疲弊して引き揚げることを望む。ロシア軍もウクライナ軍が持ち堪えられずに逃げることを望む。他方、ロシアはウクライナ全土を占領できないし、ウクライナもロシアを追い出せない。そこで、**Status Quo という状態で凍結する**。お互いがその必要性で合意すればだが。

－中ロ関係・朝鮮半島・米ロ関係－

● 9/20 A.MASLOV

(アジア・アフリカ諸国大学学長。中国ウォッチャー、当日は国際会議出席のため中国西安に滞在)

Q：中ロ関係全体をどう見るか？

・中国は、今のロシアにとって唯一の大国パートナーになっている。ロシアが選んだことではない。止むを得ないなかで、中国がそういう地位を占めるようになっていく。ロシアは中国とだけ緊密な関係をつづけるのは必ずしも安全ではないことを十分に理解している。

・中ロがこれほど緊密な関係になるとは誰も予期しなかった。しかも、過去のあらゆる対立を乗り越えて急接近する事態は、欧米も私自身も予想していなかった。だが、これは永遠ではない。未来永劫つづくとは思えない。ロシアは新しいパートナーを見つける必要があることをよく理解している。

Q：プーチンが和平の仲介役として中国、インド、ブラジルに期待する考えを示したのはなぜか？

・プーチンは、中国・ブラジル提案を唯一実現可能なものとして評価。提案の本質は、紛争の解決ではなく凍結。つまり、ロシアに有利な状況で、局面をそのままにしておくということ。他方、ゼレンスキーは不満を示し、中国の提案を批判している。

・中国の提案そのものが本質的に変わった。2022 年の提案と比べると、ブラジルとの共同提案は非現実的な内容から、より地道で現実的なものになっている。

・背景として重要なのは、中国をめぐる国際環境の変化。輸出の回復を妨げている要因に、ウクライナ戦争に対して中国がロシア寄りの立場を取っていることがある。また、中国からヨーロッパ向けの物流回路が壊れていることもあると思う。

・他方、中国は、ロシアから石油・ガスを安く輸入できているし、ロシアへさまざまな商品を輸出できる立場にもある。だが、こうしたメリットが対欧米関係の冷え込みによるデメリットをバランスできているかという点、そうでもない。

Q：中国はウクライナ戦争を仲介するつもりがあると見るか？

・そもそも中国には、ロシアのためにアメリカやその他諸国との関係を悪化させる用意はなかった。この紛争で、ロシアを支持することが中国の利益につながらないことがあらゆる形で示されている。たとえば、貿易決済上の問題で、中国側がいら立っている側面も見られる。また、ロシアへの輸出で、軍事転用が可能な設備や部品が欧

米から問題視されてもいる。

・他方、中国はロシアが敗北することも望まない。ロシアが敗ければ、中国は単独で米国に立ち向かわねばならないが、中国はそれを恐れている。技術において、まだまだ米国との競争に勝てないことを中国は悟っている。

・もうひとつ重要な側面として、中国はあらゆる戦闘行為が自国経済にダメージを及ぼすことを怖れており、この紛争が早く終わることを望んでいるにちがいない。おそらく中国側も、ロシアに対して間接的にしかるべき圧力をかけているのではないか。

・半面、中国は欧米がロシアに対してどのような制裁を科しているか、どのような対抗措置を取っているか、非常に注意深く観察しているにちがいない。資産凍結、SWIFT からの排除など、自国の立場に照らして捉えている側面もまちがいにあろう。

・中国また、いくつかの問題でロシアについて懸念している。ひとつは、ロシア経済は制裁に耐え得るか、という点。この点について言えば、中国はいまのところ安心して見ている。もうひとつは、政治エリートが離反、崩壊しないか、という問題。現時点で見ると、国民は広くプーチンを支持していることが、公開・非公開の調査で確認されている。中国は、そういう意味で安心している。

・要するに、中国はこの戦争を道義的な側面から見ているわけではない。自国に同じことが起きたときのことを考えながら、きわめて実利的な視点で見ていることを強調したい。

Q：それは、将来における台湾侵攻の可能性を想定してのことか？

・まったくその通り。制裁に対してどう対処すればよいか、ロシアを見て学んでいるということだ。

Q：中国はウクライナの問題でどこまでロシアに同調するか？

・中国は非常にプラグマティックな国。ロシアは欧米の価値観やイデオロギーを破壊することに熱心だ。つまり、中国にとって利益になる限り、同調する。

Q：中国は原油を安く買い叩いているが、ロシア側はこれをどう受け止めているか？

・この傾向は長期的なトレンドになっている。ロシアには中国以外に他の販路がないため、中国が主要な買い手になってしまっていることが背景にある。天然ガスについても、「シベリアのカ II」（中国向けの第二パイプライン）が完成すれば、欧州向けの大部分を埋め合わせできる。いずれ原油と同じようになる。

Q：「シベリアのカII」は実現するか？実現するとすれば、それはいつか？

・実現すれば、ロシアにとって歓迎すべきこと。中国は脱炭素化の流れで石炭を使わなくなっており、原油・ガスの輸入が有力になっていく。

・交渉が難航している理由は、中国側が国内価格での輸出を要求しているためだが、それは経済的に見て不可能。双方の主張はかみ合っていない。また、モンゴルの立場も阻害要因になっている。モンゴルは自国経由のパイプラインを敷設するための条件として、モンゴル国内への莫大な投資を要求している。それらが解決すれば実現は可能だと思う。

・今年中の進展はまったく無理。中国は今、契約を交わすつもりはないし、ロシア側もウクライナ紛争を考慮すれば、進展を期待できるのはまだ先になるだろう。

Q：中ロの貿易決済はほとんど人民元でおこなわれていると聞かすが、本当か？

・公式データによれば、貿易の95%以上が自国通貨建て決済されているとされるが、非公式データによれば、少なくとも3分の2が人民元建て。そのため、ロシア国内に人民元が溜まっている。以前ならこれをドルやユーロに容易く換えることができたが、今はほとんど不可能。人民元の過剰保有が大きな課題になっている。

・過剰な人民元が、ロシアから中国への直接投資を増加させている。中国からロシアにではなく、ロシアが中国に積極的に投資している。

・ズベルバンクのデータによれば、ロシア国内で登記された中国企業は、去年は8000社あまりだったのが、今年は9500社。だが、累積投資額はそれほど増えていない。投資をともなわない形の進出が多いということ。中国企業はロシアを市場と見ても、投資先とは見ていない。

・ロシア企業の富豪たちは、従来はロシアで稼いだお金を米国に預け、欧州で暮らすことを選んだが、今は同じ目で中国を見ている。数10の投資会社が中国に開設されて、開発・ハイテク企業、アルミ加工、穀物加工などの企業が進出している。中国で健康・美容、医薬品・化粧品などを製造し、日本や韓国と競合関係に入っている例もあると聞く。

Q：過去の不平等条約をめぐる、中国の領土要求が強まる可能性はないか？

・領土的な紛争の可能性は排除してよいのではないか。中国は、近年結んだ条約を維持するスタンスを打ち出し、自分が信頼できるパートナーであることを全面的に示している。ロシアとの関係も基本的にそのひとつ。2001年に領土問題が終結したが、21年に江沢民、習近平の二人の指導者が条約を再確認する形となっ

た。近い将来、領土について割譲を求めることはないと思う。

・もっとも、だからと言って、他に摩擦の可能性がないわけでは決していない。たとえば、ロシア極東における経済的な圧力が問題となったり、中央アジアで両国の利害が衝突したりすることなどは排除できない。しかし、領土紛争だけは排除してよいと思う。

Q：ロシアと北朝鮮の接近を中国はどう見ていると思うか？

・必ずしも肯定的ではないだろう。北朝鮮に対するロシアのリーダーシップが強まることを中国は望んでいない。中国の世界観では、北朝鮮を完全に管理しているつもりでいる。それだけに、ロシアが独自の考えで北朝鮮に接近し、軍事協力にまで踏み込んだ協定を結んだことは、中国にとり予期しない展開だったと思う。

・ロシアが単独で他のアジア諸国と関係を築こうとする動きも、中国にとっては不愉快な驚きだろう。中国がロシアに期待しているのは、中国を経由してか、少なくとも共同でアジア諸国との関係を築いていくことだ。

Q：中央アジアをめぐる中口の動きに変化はないか？

・中国は最近、特にカザフスタン、ウズベキスタンとの関係を深めている。中央アジアのほとんどの首都の大学に中国研究センターが設置されている。中国は中央アジアからロシアを押し出していく政策を積極的に進めている。

・半面、中国の圧力が強すぎて、中央アジア国民の反感を買っている。これが逆にロシアとの関係を維持する要因になっている。ロシアと中央アジアのあいだには、家族、親類、大学時代の友人関係など、歴史的なバックグラウンドのなかで培われてきた草の根のつながりもある。

Q：中国は「一帯一路」との関連で、上海協力機構や BRICS にどれだけ重点を置いているか？

・そもそも「一帯一路」は、中国が打ち出した巨大プロジェクトと、そのための環境づくりとして始まったが、中国と同盟的もしくは準同盟的と考えられる国々からも反発が起こった。特に、東欧のような準同盟的な国々からも反発が起きて関係が悪化している。中国としては、個別の課題を解決しつつ、多国間のアプローチとして「一帯一路」を再構築したいというスタンスに切り替えようとしているところだと思う。

・そういう意味で、中国は上海協力機構や BRICS に新たな利益や意義を見出そうとしている。多国間でやるのがよいという意味ではなく、多国間で成立している枠組みの、実利的に使える側面を重視して、そこを利用しようとしている。

Q：BRICS 首脳会議は成功するか？

・この一年間にわかったことは、BRICS の多くのメンバーが、欧米に依存しない新しい世界秩序の必要性を共有していることだ。

・問題は、どのような世界秩序を構築していくべきかについて、それぞれ異なった見方があること。意見がバラバラなので、それぞれのメンバーを満足させるようなまとまった形で世界秩序にどのように近づけることができるかによって実現可能性も決まってくる。

・中国、インド、ブラジル、トルコなどのあいだで考えの隔たりが大きく、単にアメリカ中心型ではないというだけではなかなか実現できないかもしれない。今のところ、「テロとの戦い」と「新しいタイプの金融システムの構築」という二つの共通テーマが検討されている。

Q：来年は終戦 80 周年。中ロはどのような反日式典やイベントを計画しているか？

・具体的な計画については知らない。自分は今、国際会議があつて西安にいるが、中国では全体的にナショナリズムが強まっていると感じる。それは、どこかの国を敵としたもので、日本もその対象のひとつ。反日運動はそういう大きなキャンペーンのなかのひとつ。

・中・ロは、どこかの国を敵とする形で結束を示すように運命づけられていると見えなくもない。両国はともに、歴史的な流れのなかで恨みを抱えてしまっているか、自国が正当な評価を受けていないというコンプレックスを抱いている点で共通している。これがナショナリズム高揚の背景にある。

・中・ロは、基本的に同じ国からの攻撃、イデオロギー面での圧力にさらされていると見ている。米国や日本から反ロ、反中発言がつづくあいだは、ロシアでも中国でも、そうした流れは続くだろうと思う。

● 9/20 N.A.

(ロシアを代表する朝鮮半島ウォッチャー、ソウル在住)

Q：プーチンの北朝鮮訪問の結果をどう見るか？

・両国間には互恵的な関係が成立。長期的には北朝鮮に有利と見る。

・ロシアにとり、北朝鮮は砲弾や弾薬の供給源として大変重要な存在。「戦時に余分な砲弾はない」と言われるように、すべて役立つ、何でもよい。もうひとつロシアは、北朝鮮との関係を、ウクライナに兵器を送る韓国に対する圧力として利用できる。

・北朝鮮としては、1960年代から90年代までモスクワと北京のあいだでおこなって成功したような二股外交を展開したいようだ。だが、これには矛盾がある。北朝鮮指導部は、一方で中口の矛盾や対立を利用し、うまく振舞っているかのように見せるが、他方で北の外交官やアナリストのあいだには、ロシアとの関係は長続きしない、長期的な展望がないという見方もある。

Q：中国は両者の接近をどう見るか？

・プーチン訪朝以来この3ヵ月間、中朝関係が悪化していく兆しが見えるようになっている。唯一、理由として考えられるのが口朝の接近。しかも、中朝関係を悪化させているのは北朝鮮の側だと見られている。

・つまり、中国が北朝鮮を罰しようとするのではなく、北朝鮮が、ロシアからもらったお金がポケットでガラガラ鳴っていることに惑わされて、中国から距離を置こうとしている。そもそも好きでもなかった中国と距離を置きたがっている。

・いくつか事例をあげたい。第一に、7月に中朝友好条約締結記念日のレセプションが平壤（ピョンヤン）の中国大使館で催されたのだが、昨年は北朝鮮議会の副議長が出席したが、今年出席したなかで最高ランクはキムイルソン記念大学学長だった。

・第二に、つい最近のことだが、中国の人民解放軍創設記念日に中国大使館でおこなわれたレセプションに北朝鮮の軍事アタッシェが欠席した。同じレセプションは世界中の中国大使館でおこなわれたが、北朝鮮の代表はまったく出なかったと伝えられる。

・第三に、2018年に大連でキムジョンウンと習近平の首脳会談がおこなわれた場所に記念碑が建てられたが、今年それが撤去された。そのほか、キムジョンウンが中国側に余計な敬意を示さないように、裏の指示を出している、という噂もある。また、ある非公開の演説中、キムジョンウンが中国のことを「宿敵」のように扱った、という噂もある。北朝鮮の刊行物やメディアで、中国に関する言及が激減したとも言われる。

・韓国のある有名なシンクタンクによれば、ロシアから今年6億ドルもの資金が北朝鮮の予算に入っている。これだけのお金を得ていれば、中国を無視できるようになり得ると、北朝鮮側はほくそ笑んでいるのではないか。

・ちなみに、北朝鮮指導部はロシアをリスペクトする姿勢を貫き、逆に中国を軽視しがちになっている。ロシアのエリートが北朝鮮に対してそれに匹敵するほどの敬意を示すことはこれまで一度もなかったし、いまもない。

Q：北朝鮮が中口のあいだでバランスゲームをするというのは危うい賭けではないか？

・私もまた驚いている。正確な答えを持っていない。北朝鮮は本気なのか、まじめなのか、と疑いたくなるようなことをやっている。だが、多くの情報源によって再確認されている事実が、関係が明らかに悪化に向っていることを裏付けている。

・北朝鮮がどういう意図でやっているか、その理由は私にもわからない。考えられるのは、中国は朝鮮半島北部の安定を強く望んでおり、その限りにおいて、多少中国を困らせることになっても、中国は我慢して許してくれるだろうと北朝鮮が読んでいること。

・ただし、レッドラインはある。それは核実験の禁止を破ること。プンゲリ核実験場では、すでに2年以上も前から準備は完全に整っているが、おこなっていない。中国、ロシアが制止しているのではないか。

Q：口朝の関係は軍事同盟か？また、長期的な同盟関係と見るか？

・「包括的戦略パートナーシップ条約」に、有事の際の軍事援助条項が盛り込まれていることは、形式的には軍事同盟のように読めるが、実際にはそうではない。

・ソ連時代もそうだったが、北朝鮮が起した紛争に自動的に介入する用意があるかという、そうではなかったし、いまもそうではない。1968 年にアメリカの偵察艦ブエロ号が北朝鮮に拿捕される事件があったが、ソ連は北朝鮮に対し、軍事条項の義務を果たすつもりがないことを暗に伝えたという話がある。

・ロシアとしては、この戦争が収束すれば、北朝鮮とこのような緊密な関係を維持する力も意欲もないと見ている。戦闘が止まれば、北朝鮮の弾薬は必要でなくなるので、以前の関係に戻る。レトリック上の支援と口先のきれいごとばかりで、誠実さに欠けた関係に戻ると思う。

Q：ならば、なぜ両国は条約に軍事援助条項を盛り込んだのか？

・アメリカを威嚇するためだったのではないか。ロシア側には、北朝鮮指導部を少しでも気持ちよくさせたい意向が働いたのかもしれない。

Q：条約の内容を明らかにしたのは北朝鮮側。ロシアは条約の中味を明らかにしなかったのか？

・なぜロシア外務省のサイトに条約のテキストが載らなかったかはわからない。可能性としての話だが、ロシア政府は条約を真剣に受け止めていないことを暗に示す狙いがあったのかもしれない。

Q：介入するかどうかはプーチンの判断ということか？

・プーチンか、それに代わる人物だ。

Q：ロ朝関係が変わったとしたら、ロシア側のどのような思惑によってか？

・今の関係は、あくまで戦争がつづく限りのこと。将来、戦争が終わってしまえば、経済面での互恵的な関係を築くための合理的な基盤がないことから、関係はまた元に戻る。再び距離が置かれ始める。

Q：中朝関係に変化が生じると見るか？

・いくら何でも北朝鮮のために中国との関係を損なうような非合理的なことをロシアはしない。

・実はロシア経済は、戦争開始直後に誰もが予想したよりもはるかに良く機能している。一番の理由は、中国にロシアとの貿易を続ける意思があること。中国との貿易を続けることは、ロシアが政治的な安定を維持するために欠かせない。今後何年にもわたり、ロシア内政の安定の鍵となるのが中国だ。

・他方、北朝鮮がロシアにとり二次的なパートナーであることは間違いない事実。経済規模から見ても、きわめて小さな存在。弾薬の提供と言っても、単に一種類の大口径の弾薬を提供するだけで、重要ではあるが、欠かせない存在ではない。しかも、大統領府、外務省、情報機関の皆が、北朝鮮がこれまでいかに中朝の摩擦を利用してきたのかをよく覚えている。

・中国は巨人、ロシアはいまやそれに完全に依存する存在。それに比べて北朝鮮は極小で、地球上から消えたとしても誰も気づかないほど小さな存在。北朝鮮のために中国と争う意思はロシア側の誰にもないと言える。

Q：北朝鮮が提供する砲弾、兵器の質はどうか？

・実際のところはわからない。ただ、武器は安いものにもそれなりの理由があって、市場で売買される。多少欠陥のある弾でも標的に向って飛ぶだろうし、飛んで来たら爆発するだろう。安く買えるなら、商業的にはもちろん、軍事的な意味合いもある。

Q：トランプが勝った場合、再び北朝鮮との間で首脳会談がおこなわれる可能性はあるか？

・トランプが再選されれば、ハノイ合意決着の可能性を模索するだろうと思う。トランプ自身も最近、そのことに言及しているし、実は前の4年間でも、任期中に北朝鮮と接触していたことが噂され、最後には彼本人がそれを確認する形となった。首脳会談がおこなわれる可能性は十分あると思う。

Q：（トランプが勝った場合）北東アジア情勢の構図にどのような影響を与えると見るか？

・トランプが登場すれば、米国の二国間同盟の質に、全体として大きな変化をもたらすことは避けられない。それでも「日・米・韓」の同盟の方が、「中・ロ・朝」の同盟よりも固く結束していると思う。

・ロシア、中国と北朝鮮の3国では、それぞれの指導部が抱く理想的な世界像が異なっている。「中・ロ・朝」の同盟は、互いの緊張関係の上に立っている同盟で、実利的で状況依存型であることが、米国に対する態度にも見える。

・ロシアも中国も北朝鮮も、米国による一極支配の世界を受け入れないという姿勢をとっているが、各国とも部分的に自国の要求が満たされなければ、という条件付きだ。たとえば中国は、米国が中国の経済成長を邪魔せず、米国の技術を盗むことを妨げなければ、米国による一極支配を認めてもよいと考えている。ロシアは、米国が世界第2位、もしくは第3位の超大国としてロシアの存在を認めていけばよしとする。北朝鮮は、自国が核保有国であることを米国が認めて、さらに一定の援助をしてくれれば、逆らわないということ。

・まさか、と思うかもしれないが、実は北朝鮮は、米国が自分を同盟国として認めてくれることを最も望んでいる。米朝の同盟として中国に敵対する同盟を組むことを北朝鮮が望んでいる、という情報に接したとき、私は耳を疑ったが、いろいろなところからそういう情報が出続けており、北朝鮮の指導部内に深く根を下ろした「妄想」だとわかっている。

Q：ロシアに対する見方について、日本人と韓国人の違いをどのように感じるか？

・日ロ関係と韓ロ関係の相違は大きい。ロシアに対する日本人の見方は非常にネガティブ。日本人にはロシアとの戦争の記憶もあるし、領土問題のしごりもある。韓国人にはそういうところがない。韓国人は、期待できないほど良い目でロシアを見ている。日本人はソ連やロシアがおこなってきた不当な行為をしっかりと記憶しているが、韓国人にはそうした歴史がないか、覚えていないかのどちらかだ。

・第二に、米国との関係における本質についてだ。概して日本人は対米関係を無条件に受け入れているが、韓国人にはそういう要素が必ずしもあるようには思えない。自立を求める勢力が強いし、米国と距離を置く傾向がある。しかし、日本社会では対米追従が当たり前のことのように受け入れられている。

・ウクライナ問題にしても然り。日本社会では対米関係に照らして見るのが圧倒的に多く、ロシアの行動に憤慨し、ウクライナ支援の輪が韓国以上に広がっている。これに対して、韓国社会では、エキゾチックな部族同士の、自分たちにはわからないところで起きている紛争ぐらいに受け止められている。

・もちろん、ウクライナが大国に侵略され、犠牲になっていることに同情はするが、自分たちからは遠い無縁の紛争として見ている。日本人は、韓国人に比べて、植民地戦争、侵略戦争の犠牲者としてのウクライナ国民に

同情し、共感する気持ちが強いように思う。

Q：小泉（進次郎）議員が北朝鮮を訪問し、首脳会談をおこなうと言っている。北は応じるだろうか？

・北朝鮮にとり、世界は牧場のようなもの。牛さえを捕えれば、搾りたての乳は自由にいくらでも飲める。援助はどこからでも、得られるところから得る。日本は一番素晴らしい乳、一番おいしい牛のひとつ。魅力的な相手だ。

・だが、北朝鮮が狙っているのは、形式的な国交正常化と引き換えに、過去の植民地支配に対する賠償金を手に入れること。データはさまざまあるが、少なくとも 100 億ドル程度の賠償金がほしい、と北朝鮮は言うだろう。

・その 100 億ドルを手にするのを不可能にしているのが国連安保理の制裁だ。小泉が北朝鮮へ行っても、制裁を迂回した形で送金することはできない。渡す、と約束するしかできない。私のポーランド人だった叔母さんが言っていたように、「約束はおもちゃなんだけど、おバカさんだから、それでも喜ぶんだ」となってしまう。

・もし小泉を迎えたとして、北朝鮮は何が得られるか？唯一考えられるのは国際的な孤立が解かれること。だが、それは彼らにとって死活的ではない。孤立していても何とか暮らせる。必要なのは資金だ。

・日本は何を得られるか。拉致被害者の帰還だ。だが、それは生きていればの話。私は生きてどうか全く知らないが、おそらく誰かは生きていだろう。けれども生きていても、北朝鮮はすぐに返しはしないだろう。約束の代わりに拉致被害者を帰還させることはあり得ない。生きていればなおさら、北朝鮮としては唯一の外交のカードになるからだ。そのカードをいつ切るか。おそらく例の 100 億ドルか 150 億ドルを手にした時だ。

・小泉が行って、約束すると言っても、制裁が科されているからできないと言っても、制裁が解除されるのは例えば 20 年後の話。20 年後には、小泉って誰？ということになる。誰も覚えていない。小泉の息子も何をやっているかわからない。カーレーサーかもしれない。世襲が多いからと言って、必ずしも政治家になるとは限らない。

・北朝鮮は何のために拉致被害者を渡してしまったのかとなる。だから、渡さない。現金を手にはできない間は渡さないと。これが小泉の訪問の可能性についてだ。

・今回、小泉がピョンヤンへ行ったらどうなるか？北朝鮮は拉致問題を提起しないと約束すれば、訪問を受け入れるだろう。お父さんのように弁当を持って行って、ピョンヤンでそれを食べて、キム総書記と微笑み合って握手をして帰るということなら北朝鮮は訪問に応じるだろうが、それで拉致被害者を引き渡すとは到底思えない。

・そうした訪問が、日本で小泉の人気を高めるのかどうか私は言いかねるし、日本の国益に叶うかもわからない。私が確率的なこととしてわかっているのは、北朝鮮としては制裁が解除されない間、拉致被害者を絶対に渡そうとはしないことだ。

●9/20 D.SIMES（ロシア国営「チャンネル I」のコメンテーター。モスクワ在住）

注）1947 年生まれ。70 年代に米国へ亡命。ロシアとアメリカの両国籍を持ち、ニクソン元大統領の通訳や外交政策顧問も務める。米共和党系シンクタンク「ナショナル・インタレスト・センター」の元会長。2022 年 10 月からロシアに滞在。看板番組「グレート・ゲーム」のキャスターを務める。24 年 8 月、米司法当局によって、制裁法に違反するマネーロンダリング容疑で起訴。西側メディアは、彼を「クレムリンのチア・リーダー」と呼ぶ。

Q：トランプはウクライナ戦争をすぐに終わらせると主張しているが、どのようにして解決すると思うか？

・トランプが停戦、和平をどう実現しようとしているのか、私にはわからない。確実なことは、彼が平和を望む立場を打ち出していることが、ロシア政府によって歓迎されるということだ。またトランプは、現実をウクライナが認めなければならないこと、ウクライナが長期的に NATO への加盟を放棄することを認めようとしている。この立場はロシアの関心事となっている。

・一方でロシア側は、トランプの一期目に彼がロシアに対してどのような政策が打ち出したかを記憶しているはずだ。トランプの時にこそ、深刻な経済制裁が発動されたこと、全体的に米ロ関係を改善するような政策は少なかったことをきちんと覚えている。

・ウクライナに対する殺傷兵器の供与がトランプの下で始まったことも記憶に新しい。トランプが選ばれたとしても、彼がどれだけ米ロ関係を改善しようと動くのか、望んだとしても実現できるのか、ロシア側には一定の疑問がある。

Q：近い将来、停戦となる可能性はどれぐらいあるか？

・ロシアは決して急いだり、焦ったりはしていない。

・ロシア側は、戦闘行為は首尾よく正しい方向に向かっていると考えている。もちろん、戦争は残忍で悲惨な結果を生み出すが、ロシア軍はますます増強されている。ロシアの軍事費は GDP の 8.3%、ロシア軍の兵力は 223 万人にもなっている。さらに、「核ドクトリン」が修正されて、核兵器を使う敷居が低くなり、もっと容易に核兵器を使えるようになっている。

Q：ゼレンスキーの「勝利計画」をどう見るか？

・ゼレンスキーの提案は現実から完全に乖離したものだ。ロシアを降伏させるための計画と言えるが、ゼレンスキーはこれまでに自国どころか、アメリカを含めて世界 50 か国から支援を得て、ロシアを降伏させようとして失敗してきた。

・この提案は、ゼレンスキーとバイデンの間の外交の一環として、あるいは米国と同盟国との外交デモンストレーションの一環として見ることは可能だとしても、何かロシアが加わった形での交渉プロセスの一部として検討する価値があるかと言えば、それはまったくない。ロシアとは無関係な存在として見るべきだ。

Q：停戦はまだ先ということか？

・ロシアがどのような条件で、どのようなアイデアをもとに交渉をするか、どの国が仲介するか、などについて今の段階で議論するのは時期尚早だと思う。交渉を始められるだけの理解が、特にウクライナ、米国、イギリス政府に備わっていない。反ロシアのプロパガンダ行為を止めて、真剣な交渉のテーブルにつくための前提条件は整っていないと思う。

Q：共和党のヴァンス副大統領候補の言う紛争凍結案をどう見るか？

・ヴァンスは、まだ上院議員でしかなく、副大統領になったとしても、外交を決めるような役割を果たすかどうかかわからない。彼の提案は、興味深いアイデアのひとつとして以上に見るべきではない。

・重用なのは、ゼレンスキーが戦闘をエスカレートさせることでロシアの立場を弱くするという期待はそもそも誤っていることだ。むしろ、逆の効果を生むだろう。ゼレンスキーと彼の支援国が理解すべきもう1つの重要なことは、ウクライナの NATO 加盟を前提にして交渉を進めるのは不可能であることだ。ウクライナが NATO に加盟することは、ロシアとしては到底受け入れられない。

・もう1つは領土に関することだ。領土は奪還できない。ロシアに編入された領土はすでに憲法に規定され、法律にもなっている。

・もし真剣にロシアからもう一度領土を奪い返そうとするなら、それはまじめな交渉の仕方とは言えないものになる。ロシアがどういう条件でこの領土をもう一度手放すことが可能なのか、それは話し合う価値のないものだ。破滅的な何かの結果としてロシアが壊されない限り、望めないと同時に、それは誰も想定していないことだ。

・クリミアをどうするかという議論が出ているが、そうした人たちがロシア人の心理を全く理解していないことの証拠でもあると思う。クリミアはモスクワ、サンクトペテルブルクと同様にロシアの領土の不可分の一部だということを、ロシア人は皆感じている。ロシア人のメンタリティを理解していないことの証拠だ。

Q：ロシアはユーラシアの枠組みをどう変えようとしているのか？

・これは非常に焦眉の問題。どのような結果になるか、まだわからない。今は、そのプロセスへと第一歩を踏み出

そうしている段階にすぎない。

・数百年にもわたって、ロシアは自らを西側の一部であると誤解していた。私たちは決して西側の一部ではない。ロシアのエリートはヨーロッパ、米国、イギリスを目指したりしたが、それは間違いだった。それを悟ったのは、西側がロシアの主張も聞かずに新しいルールを作り、どのようなルールかロシアにわからせず、そのルールに従わないからと言ってロシアを罰しようとしているからだ。

・ロシアを貶めようとする悪い奴らが、ロシアを傷つけようとしている中であって、ロシアがユーラシアに新しい安全保障の枠組みを作ろうとするのは自然な成り行き。10 月に 21 か国が参加して、BRICS 首脳会議がロシア中部のカザンで開かれる。中国の習近平国家主席などが参加する。

・地図を見れば、ロシアはイラン、北朝鮮、モンゴル、中国と接しているが、地図の方向を変えて北極から見ると、大陸がいかに統一しているかが見えてくる。ロシアはそこを強みにして新しい安全保障の枠組みを考えている。イランや北朝鮮などを例外とせず、ロシアとの協力を目指そうとしている国々との外交、軍事面を含めあらゆる関係を進めようとしている。

・ちなみに、ロシアがイニシアチブを取ることは、北朝鮮やイランのスタンスやモデルを支持していることを意味しない。そうではなく、主権国家として彼らが自分の道を選ぶ権利があることを尊重し、できる限り一緒に、アメリカ中心の覇権型の秩序に代わり得る、新たな秩序を構築していこうという試みだ。

Q：最近の日ロ関係をどう評価するか？

・北方領土問題については、ソ連崩壊直後から日本の外交官や政府高官などとワシントン他で会う機会があり、会談のなかでこの問題が何度も取り上げられた。あの時は、領土問題を解決することができたかもしれないという印象を持った。またその後、外交官や高官によって東京訪問もアレンジされた。おかげで有意義な意見交換ができたことをいまだに喜ばしく思い出している。

・ロシア人は西側を見る目とは違う目で日本を見ている。西側を見ると同じように日本を見ているわけではない。日本が西側とは若干異なるスタンスを示してきたことをロシア人は根拠として見ている。

・2014 年にウクライナでクーデターを起こし、ドンバスに対して攻撃をさせたのもアメリカであるということ、今の戦争を引き起こしたのもアメリカであるということを、ロシア人はきちんと見ている。NATO がドンバスを攻撃させたのであって、日本はこれに関わっていないことをロシア人がちゃんと見ている。そういうこともあって、日本を見る目はずいぶん違う。制裁も焦眉の日本政府の発意によって発動されたものではないとロシア指導部は見ている。

<後編、了>